

博士学位論文審査要旨

2012年7月7日

論文題目：ブルクハルト—教育としての歴史

学位申請者：森田 猛

審査委員：

主査：文学研究科 教授 服部 伸

副査：文学研究科 教授 中井義明

副査：関西大学文学部 教授 芝井敬司

要 旨：

本論文は、19世紀スイスの歴史家ブルクハルトの知的業績・文化史学を、「教育としての歴史」という観点から、その理念と方法を分析し、同時代の社会との関係において、その歴史的意味を考察する史学史的、思想史的研究である。

注目すべき所論は次の通りである。第1章「市民の教育者」では、市民の援助によって19世紀に再興されたバーゼル大学におけるブルクハルトの大学講義、大学予科授業、公開講演を分析し、教養ある市民層という精神的階級の育成、彼らに対する生涯教育が、ブルクハルトのライフワークであったこと、文化史学とは、その教養教育に援用された方法であったことを指摘する。

第2章「革命時代の人間—オプティミズムの時代」においては、バーゼル大学教授就任当初から継続した講義「革命時代史」を手がかりに、ブルクハルトの時代観を解き明かしている。すなわち、フランス革命以降の時代には、物質的な「幸福」をめざす楽観的な世界観が支配的になり、中央集権的な国家の力によって社会を恒常的に変革する動きが強まるが、その結果、ヨーロッパに特徴的な、古代ギリシアの都市国家以来、都市エリートによって培われてきた精神的自由が奪われていくという。

第3章「歴史学と近代国家—プロフェッショナルイズムの時代」と第4章「歴史術としての文化史学—ディレッタントイズム」では、次の点を明らかにした。ランケの後継者たちが、師の研究手法である厳密な「史料批判」を継承しながら、専門家集団として国家的事業に参画しつつも、特権的専門家集団となったことで、歴史研究から一般国民を排除していることをブルクハルトは批判した。他方で、ブルクハルトはランケ史学のもうひとつの特徴である「普遍史」を継承することで、ローカルヒストリーを「世界史」へと接続させ、市民たちに開かれた歴史学を打ち立てようとした。これは、ランケ学派が拒絶する歴史事象の「類型化」を通して、市民に向けた教育のために有用な歴史学、すなわち実用主義的な歴史学の確立をめざすことになるのである。

第5章「ヨーロッパ的なもの—ペシミズムの復権」では、偉大なる人びとが、個と全体を闘争的に結びつつ多様性を現出する存在であり、これこそが精神的自由の土壌であるヨーロッパを醸成するものであったというブルクハルトの思想を浮かび上がらせる。ブルクハルト史学は、このような思想を具体的に示すものであった。

第6章「精神史としての文化史学」は、ブルクハルトの「教育としての歴史」がめざしたものは、教養ある市民層が、生涯にわたって歴史的なものの研究を行うことであり、それは、革命時代において断絶しつつある、過去との精神的連続性を意識的に保持することにあつたと確認する。彼は、過去と断絶した革命時代に、教養層という階層に、精神の連続、ヨーロッパの社会を人間社会ならしめる原理の維持を期待したのである。

これまでのブルクハルト研究では、もっぱら歴史研究者としての側面に焦点が当てられてきたため、彼の講義録は分析されてこなかった。しかし、学位申請者は、ブルクハルトの歴史学を、彼が生きた時代の文化的・社会的文脈の中でとらえなおすために、彼の教育者としての側面に着目し、徹底的に講義録、さらには書簡類を読み込んだ。その結果、ランケ学派によって否定的に評価された「類型化」をともしなうブルクハルトの文化史学が、実は、「普遍史」を志向していたランケ本人を継承するものでもあったという点を実証的に明らかにしたうえ、まさにその「類型化」が、学術研究としてよりも、むしろ教育上の必要性から強調されたことも指摘している。たしかに、ブルクハルトが生きた空間を文化的・社会的文脈から明らかにする際に、主としてブルクハルト自身の言葉を引用するという手法は、客観的な事実を十分にとらえ切れていないという欠点はあるが、かえって、ブルクハルトの思考の深まりを確認してゆくうえでは有効な手法であり、本論文全体を通して、これまでのブルクハルト像とは異なる新しいブルクハルト像を提示したことは史学史研究上意義深い。

よって、本論文は、博士（文化史学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

学力確認結果の要旨

2013年7月7日

論文題目：ブルクハルトー教育としての歴史

学位申請者：森田猛

審査委員：

主査：文学研究科 教授 服部 伸

副査：文学研究科 教授 中井義明

副査：関西大学文学部 教授 芝井敬司

要 旨：

2013年7月6日、10時より徳照館520号室にて2時間にわたって、学位申請者に対して口頭試問をおこなった。

学位申請者は、提出論文の内容とドイツ・スイス近代史、さらに史学史に関する質疑に的確に応答し、本論文の研究水準の高さと学術的価値を証明した。さらに申請者は英語、ドイツ語においても十分な学力を有することが確認された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

博士學位論文要旨

論文題目：ブルクハルト—教育としての歴史

氏名：森田 猛

要旨：

19世紀スイスの歴史家ブルクハルトの知的業績・文化史学を、「教育としての歴史」という観点から、その理念と方法を分析し、同時代の社会との関係において、その歴史的意味を考察した。従来の史学思想的研究が、歴史学の研究的側面（「研究としての歴史」）を注視し、その史学内的な意味を問題にしてきたのに対し、本研究は、歴史学の教育的側面を通して、その社会的脈絡、歴史学の史学外的状況との連関に眼を向けることによって、歴史学の歴史をいっそう広範な影響関係からとらえようとしているところに特徴をもつ。そのような意味で、科学史の一領域にとどまる狭義の史学史を脱却し、一般史的な志向をもとうとした「新しい史学史」（イッガース）の方法論に通じる部分があるともいえよう。

ブルクハルトの生涯を一瞥すると、バーゼル大学正教授に就任後、著述活動を犠牲にしてまで、同大学における教育活動に専心したという、近代の歴史家としては特異な経歴につきあたる。「研究としての歴史」の視点に立ち、歴史家＝歴史研究者とみなす旧来の史学史研究は、この伝記事項を軽視し、著書と講義草稿を同一視することによって、誤解の上に彼の人物と仕事を評価してきたといえる。本研究は、ブルクハルトがもっとも重視した活動を研究視座の中心におき、「オリジナルな位置」において彼を評価しようとするものである。そのために歴史学を「教育としての歴史」としてとらえなおし、歴史家＝「歴史の教師」（レーヴィット）と再定義した。その立場から、ブルクハルト史学とその時代について、つぎの6章にわたって考察した。

第1章「市民の教育者」においては、スイス最古の大学・バーゼル大学—市民の援助によって19世紀に再興した小規模教養型大学—におけるブルクハルトの3つの教育活動（大学講義、大学予科授業、公開講演）を分析し、教養ある市民層という精神的階級の育成、彼らに対する生涯教育が、ブルクハルトのライフワークであったこと、文化史学とは、その教養教育に援用された方法であったことを指摘した。また、大都市ベルリンからここに赴任したディルタイの判断とブルクハルトのそれを対比することによって、バーゼルという文化的空間の歴史的な位置づけを試みた。ブルクハルトにとって、それは「古いヨーロッパの教養」を育んだ市民的・小国家的な気風が息づいている価値ある空間であったとした。その文化的担い手である教養ある市民層と共に生きることを「歴史の教師」ブルクハルトは、ヨーロッパの歴史家として選択したと論じた。

第2章「革命時代の人間—オプティミズムの時代」は、正教授就任初期から継続した講義「革命時代史」を手がかりに、ブルクハルトの時代判断をその教育的脈絡から解き明かした。彼はフランス革命以降の現代を「革命時代」と呼び、ヨーロッパ史上類例のない特異な時代として認識していた。ヨーロッパ的な社会の特質を小国家に認め、古代ギリシアのポリスにその源流を求めるブルクハルトにとって、中央集権的な大国家を建設しようとする現代史の趨勢は、ヨーロッパ世界の大きな危機を意味した。すなわちそれは物質的な「幸福」をめざすオプティミスティックな世界観によって、社会を恒常的に変革していくものであったが、ヨーロッパ世界に特徴的な精神的自由の土壌を駆逐していくものとして、彼の眼に映じたのである。そのような洞察を1840

年代の新聞記者時代に洞察した彼が、1846年のローマ滞在によって旧社会の価値を深く体験してのち、その成果を教育の場において生かそうとしたと指摘した。

第3章「歴史学と近代国家—プロフェッショナリズムの時代」においては、若き歴史家ベルンハルト・クーグラへの書簡を手がかりに、同時代の歴史学界、とくに科学化・職業化プロセスを推進し近代歴史学の社会的構造を形成したドイツ歴史学界に対するブルクハルトの見方を精査し、文化史学の史学史的な位置づけを試みた。その結果、「近代史学の父」ランケの史料批判を継承し、国民国家不在状況の下、ドイツ国民の歴史を叙述した「ランケ学派」＝ドイツ正統史学を、ブルクハルトが古代オリエントの知識階層＝国家的特権階級と同定していたことを指摘した。彼はそこに特権階級特有の「内的限界性」を看取し、むしろそのような階級を形成しなかった古代ギリシアの学問にあるべき理想を求めた。そのためスイスの歴史協会に積極的に協力し、協会の主要活動領域ローカルヒストリーに、古代ギリシア史学の萌芽をみたのである。ブルクハルトは、ドイツ正統史学が承継しなかったランケのもうひとつの遺産、普遍史理念を積極的に継承し、これをローカルヒストリーから「世界史」への浮上原理とした。そのような伝統の創造的融合のなかに、文化史学が生まれたと論じた。

第4章「歴史術としての文化史学—ディレクタントイズム」では、歴史学興隆の世紀19世紀に「歴史病」をみたニーチェとの関係から、歴史のディレクタント研究者育成を志したブルクハルトの史学観を明らかにし、ディレクタント史学の方法として構築された文化史学の機能と方法論的特徴を分析した。古代ギリシア史学の「実用主義」に歴史的知の本来的な役割を求めるブルクハルトは、普仏戦争の勃発以来、トゥキュディデス的な「出来事の歴史」ではなく、ヘロドトス的な人間の内面に向かう歴史によって、それを実現することを企図した。典型的な歴史考察法をとる文化史学による教育は、教養層にディレクタント研究を手ほどきするものであり、その研究はプロフェッショナルな歴史学が科学外的世界に放逐した実用主義的＝社会的歴史的機能を、歴史学に担保するものであったとした。

第5章「ヨーロッパ的なもの—ペシミズムの復権」では、普仏戦争期にブルクハルトの文化史講義群において展開されたヨーロッパ史像を分析し、革命時代に生きるバーゼルの聴講生にとってそれがいかなる意味をもったかを考察した。進歩史観的オプティミスティックな歴史像が広範に浸透する時代に、これを脱構築し、進歩史観によって放逐された歴史的要素を救済する役割をブルクハルトの4種類の講義が果たしていたことを指摘した。彼が提示するペシミスティックなヨーロッパ史像は、地上の重圧に忍耐し行動する人間の形姿に、人間精神の力を看取するものである。そこに登場する偉大なる人びとは、個と全体を闘争的に結びつつ多様性を現出する存在であり、まさに精神的自由の土壌ヨーロッパを醸成するものであった。そのようなヨーロッパ的なものを観想することを、新しい世代に勧めた。それは地上的繁栄に向けて平板化していくオプティミズムとしての危機に対して、精神的なものを擁護する対抗手段であったと指摘した。

第6章「精神史としての文化史学」は、文化史学による教養層の教育が、歴史的世界に対してもつ意味について、ブルクハルトの史学思想に則して考究した。「教育としての歴史」がめざしたものは、教養ある市民層が、生涯にわたって歴史的なものの研究を行うことであったが、それは、革命時代において断絶しつつある、過去との精神的連続性を意識的に保持することを意味した。ブルクハルトによれば、人間は物質的個別存在であるだけでなく、精神的共同的存在である。前者に対応するものが自然であり、後者に対応するものが歴史である。自然と対照的な性格をもつ歴史は、人間固有のあり方を構成するものであった。過去を桎梏として退け、「自然に帰れ」とするルソーら啓蒙主義者の主張は、人間を自然状態＝野蛮に戻し、歴史的存在としての

人間を死滅させるものであったといえる。それは、人間精神のかつてなき存亡の危機を意味していた。ブルクハルトは、そのような時代に、教養層という階層に、精神の連続、ヨーロッパの社会を人間社会ならしめる原理の維持を期待したと結論づけた。

以上の考察から、ブルクハルトが教養層への教育によって、歴史がもつ歴史的社会的な作用力（歴史の実用主義）を実現しようとしたことが確認される。彼が洞察した多様性と自由のヨーロッパは、未曾有の社会変動期、革命時代においては社会から消失しつつあり、歴史的考察を通して教養層の内面世界において保つことができるのみである。だが、そのような教養層の営為が、次代の社会形成に関わりうることをブルクハルトは信じていた。それらのことは科学世界への貢献＝研究に特化した近代歴史学に対し、歴史的知のいっそう豊かな力と可能性を提示するものであったといえるだろう。